

東北へ注ぐ 讃岐力

東日本大震災 5年

東日本大震災の被災地に新たな産業や雇用を生みだそうとしている香川の人たちがいる。平和の象徴であるオリーブの北限での栽培に挑戦し、讃岐うどん店を出した。震災から5年。香川らしさを生かして被災地の今



⑤2015年6月、荒井信雅さんが指導しながらオリーブ約100本を植えた
⑥雪の中に立つオリーブ。いずれも宮城県石巻市、荒井さん提供

石巻・北限オリーブ 越冬成功 収穫へ



と向き合っている。小島町町の農業生産法人「アライオリーブ」の代表園主荒井信雅さん(56)は宮城県石巻市で「北限のオリーブ」栽培に取り組んでいる。2013年に石巻の商工会議所の関係者から「平和の象徴のオリーブで復興支援ができないか」と相談されたのがきっかけだ。

荒井さんは震災当時、独立したばかりで余裕がなく、十分な支援ができなかった。「今なら何かできる。ありがたい話だ」と思ったという。アライオリーブの研修生だった三豊市出身の大井裕人さん(40)が、被災地に移り住んで技術指導をすることになった。大井さんは被災自治体で働く復興支援専門員の試験を受け合格した。家族を香川に残し、14年春に石巻市に渡った。

オリーブ栽培は新たな産業の創出をめざす石巻市の事業になった。昨年度、2カ所で15本ずつ試験栽培したところ、25本が越冬できた。「石巻は雪がそれ

セルフ式 独自メニューも 陸前高田・うどん店



「びっぴ家さぬき陸前高田総本店」で働く女性3人。岩手県陸前高田市、松田哲也さん提供

ほど多くなく、気温も零下10度にはならないからギリギリいけるだろう」と荒井さんはみる。今年度は地元の農事組合法人に管理を委託し、沿岸部の山手に約100本を植えた。

まだ東北ではオリーブへのなじみが薄い。オイルを搾れるだけの実を収穫するには時間がかかる。所得につながる実感がなければ、地元の人たちも動きにくいだろう、と大井さんは感じている。派遣は残り約1年となった。「復興を支えたいという気持ちの橋渡し役として頑張りたい。今秋は少しでも収穫し、地元の人に塩漬だけでも試食してもらいたい」と話す。

岩手県陸前高田市の讃岐うどん店がまもなく開店2年を迎える。香川県中小企業家同友会が「被災地に雇用を」と資金約700万円を全国から募ってオープンした「びっぴ家さぬき陸前高田総本店」だ。パート従業員の高田総本店の女性3人が独自メニューも開

「接客業ができるのか心配になるほど笑顔がなかった皆さんが、元気に働いてくれてうれしい。自立型の復興支援をめざして良かった」と松田さんは話す。2号店も計画中という。(多知川節子)

セルフ形式で、かけうどんは350円。麺は当初から計画に携わる高松市のチェーン店「たも屋」から冷凍で送っている。希望があれば、うどん打ちの修業も香川で受け入れる方針だ。店員の中心となっている佐藤忍さん(40)は「うどんのゆで方もセルフ形式もわからず、最初は大変だった」と振り返る。今は、タラの芽の天ぷらや茎ワカメのトッピングなど地元食材も使い、うどんだしを使った炊き込みご飯など新メニューにも取り組んでいる。「責任もあるけれど、やりがいや楽しさも感じる。支援してくれた皆さんに感謝しています」

出店を発案した高松市の税理士松田哲也さん(53)は年数回、陸前高田を訪れ、激励や経営指導をしてきた。震災翌年に被災地を訪れた時、「欲しいものは何もねえ。ただ、明日することがないのがつらい」と言われたのが原点だ。

地元の一般社団法人「三陸ポラーノ広場」が運営している。代表理事の森谷陽樹さん(60)は「客足は復興工事の作業員の入りに左右されてきたが、地元の高齢者も増え定着してきた」と話す。

発するなど意欲的に働いているという。